

高等学校歴史教育における「パフォーマンス課題」の開発 —明治の文明開化を題材として—

山下 大喜*

Performance Task for History Education in High School: The Case of Meiji Japan

Daiki YAMASHITA

Key words: Performance Task, Curriculum Studies, History Education, High School, Meiji Japan

はじめに

本稿は、高等学校歴史教育における「パフォーマンス課題」の開発を、明治時代の文明開化を題材に実践し、その授業実践を検討しようとしたものである。

2017年/2018年改訂の学習指導要領では、「生きる力」を理念として継承しながら、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」、「学びに向かう力・人間性等」が「育成すべき資質・能力」の三つの柱として明記された⁽¹⁾。今次改訂において地理歴史は科目再編があり、必修の「歴史総合」、「地理総合」と「日本史探究」、「世界史探究」、「地理探究」の構成となっている。地理歴史の目標には、「社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な公民としての資質・能力を次のとおり育成することを目指す」とあり、課題の設定、史資料の分析、その考察をもとにした議論の構築が重視されている⁽²⁾。この目標を体現するためには、「どのように学ぶか」として「主体的・対話的で深い学び」が大きくかかわってくる。この「主体的・対話的で深い学び」とは子どもを主語とした学びであり、教師はその視点に立った不断の授業改善が求められている⁽³⁾。さらに、今次改訂によって高等学校では指導要録における観点別評価が本格的に導入されたことから、知識の習得だけにはとどまることのない多様な学びをみとり、その学びを継続して促していく姿勢が重要となる。しかしながら、歴史教育といえば「暗記」を連想しやすいものでもある。例えば、丸山真男は、加藤周一との対談のなかで、「学生のころから、歴史は暗記ものと

呼ばれて嫌われて」いて、「歴史感覚と何ら関係のないことを一生懸命暗記する」のは「試験制度と結びついた」歴史教育の影響が大きいと述べている⁽⁴⁾。ここで示唆的であるのが以下に記す佐藤卓己の指摘である。佐藤卓己は、『『暗記する歴史』が反歴史学であるのは、それが読書や思考に導かないため』であり、「歴史研究は読書から始まる思考と記述のプロセス全体を含んでいる」ことから、「記述するためにはまず読み、考えることが必要である」と論じている⁽⁵⁾。この佐藤による指摘は生徒自身が「主体的・対話的で深い学び」の視点に立って課題の設定、史資料の分析、議論の構築を体現していく土台となるものである。

以上の背景をふまえて、本稿では、明治の文明開化を題材に「パフォーマンス課題」を設定した実践を取りあげる。当該の実践は、執筆者が教科担任として担当し開発したものである。「歴史総合」、「日本史探究」を射程に入れた試行的実践であるため、科目名は限定せずに表題を「高等学校歴史教育」とした。まず第1節では、今次改訂で高等学校に導入された観点別評価の概要をふまえながら、本実践で設定した「パフォーマンス課題」との関係性を示す。第2節では、設定した「パフォーマンス課題」をもとに単元全体の展開過程を論じる。そのうえで、第3節では、言語活動とキャリア教育の観点を示したうえで実際の作品例を検討する。

観点別評価と「パフォーマンス課題」

先にあげた「主体的・対話的で深い学び」は教師にとって授業改善の視点となるものである。学習評価との関連でいえば、「指導と評価の一体化」が重要となり、学習指導要領「総

(2024年1月22日受理)

* 宇部工業高等専門学校 一般科 (社会科)

National Institute of Technology, Ube College, Japan

則」では「各教科・科目等の目標の実現に向けた学習状況を把握する観点から、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら評価の場面や方法を工夫して、学習の過程や成果を評価し、指導の改善や学習意欲の向上を図り、資質・能力の育成に生かすようにすること」とある⁽⁶⁾。

この「指導と評価の一体化」を基本姿勢としながら、指導要録における観点別評価を検討していかなければならない。今次改訂にもなって高等学校に本格導入された観点別評価は、上述した「育成すべき資質・能力」に対応させる形で、「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」になっている（「人間性」は観点到含めず、「個人内評価」とする）⁽⁷⁾。評価研究といったときに、重要となるのは、西牟田哲哉が論じるように、観点の相互関係に留意することである⁽⁸⁾。ここで西牟田は、当時の観点到そくして、中心軸の「思考・判断」に対して「知識・理解」と「資料活用」が両翼に位置し、「関心・意欲・態度」が各方面へ恒常的に機能すると論じている⁽⁹⁾。歴史学は営みとして史資料との正対が基本姿勢となり、そこでの分析・考察が自らの歴史的思考を深めていくことになる。こうした学びを体現していくための一つの切り口として、本稿では「パフォーマンス課題」を取り入れた実践を検証する。「パフォーマンス課題」とは、「様々な知識やスキルを総合して使いこなすことを求めるような複雑な課題」を指しており、日本でも2000年代以降の「パフォーマンス評価」の紹介を皮切りに多くの開発的研究が蓄積されてきた⁽¹⁰⁾。西岡加名恵は、現在の観点別評価に照らし合わせながら、「パフォーマンス課題に取り組む際には、より質の高い作品や実演を生み出すために試行錯誤しつつ粘り強く取り組んだり、自らの取組の良い点や問題点を的確に自己評価し、調整したりすることとなる」ため、「パフォーマンス課題」は『「思考・判断・表現」と『主体的に学習に取り組む態度』を一体的に見取る』のに「適した評価方法」であると論じている⁽¹¹⁾。こうした議論をふまえるならば、「パフォーマンス課題」は知識の習得だけにはとどまらない歴史的思考を中心軸とした授業デザインの手がかりになりうるものといえる。

「パフォーマンス課題」の設定と単元の展開過程

本実践は、明治時代の学習を対象としたものである。これまでの学習では、まず〈四つの口〉（長崎・対馬・薩摩・松前）から江戸時代の国際関係をとらえ、外国船の出現によって幕府も対外的な危機に直面し、その対応が必要になってきたことを学習した。そのうえで、ペリー来航、日米修好通商条約、尊王攘夷、倒幕の順に学習し、明治時代の学習に入っている。

明治新政府からしてみれば、幕藩体制の解体とともに新たな政治体制を確立することが急務であった。戊辰戦争を経て、明治新政府は方針として五箇条の御誓文、五榜の掲示を提示し、富国強兵、殖産興業を推し進めていく。さらに、天皇が

京都から移ることで、江戸が東京となった。これら明治維新の学習は、「歴史総合」であれば「B近代化と私たち」の「(3) 国民国家と明治維新」、「日本史探究」では「D近現代の地域・日本と世界」の「(3) 近現代の地域・日本と世界の画期と構造」に該当する。なかでも、本実践では、明治の文明開化を題材に「パフォーマンス課題」を設定するにあたって、「歴史総合」の「(ア) 国民国家の形成の背景や影響などに着目して、主題を設定し、アジア諸国とその他の国や地域の動向を比較したり、相互に関連付けたりするなどして、政治変革の特徴、国民国家の特徴や社会の変容などを多面的・多角的に考察し、表現すること」、「日本史探究」の「(イ) 欧米の思想・文化の影響、産業の発達の背景と影響、地域社会における労働や生活の変化、教育の普及とその影響などに着目して、主題を設定し、日本の工業化の進展、近代の文化の形成について、事象の意味や意義、関係性などを多面的・多角的に考察し、歴史に関わる諸事象の解釈や歴史の画期などを根拠を示して表現すること」に着目した⁽¹²⁾。まさしく文明開化は、明治維新という「政治変革」のさなかにあったことであり、それともなう「社会の変容」や「文化の形成」を考察することができる題材である⁽¹³⁾。

文明開化は、西欧の制度、思想、生活様式を積極的に取り入れようとするものである。また、積極的な受容は幕末に結んだ不平等条約の改正が関連しており、文明開化はそのための「国家主導による一連の啓蒙的な文化政策ないし教育政策」の側面をもちあわせている⁽¹⁴⁾。例えば、帝国書院の『明解 歴史総合』では、「文明開化とジャポニズム」の特集ページがある⁽¹⁵⁾。まずは、基礎・基本の確実な習得として、明治維新の諸改革の学習に続く形で、文明開化とは何か、具体例としてどのようなものがあるか、当時のカレライスはどのようなものであったのかについて学習した。そして、次時には以下のような「パフォーマンス課題」を提示した。この「パフォーマンス課題」に対する「本質的な問い」は「西欧からの受容が社会生活にどのような変容をもたらしたのか」、「永続的理解」は「条約改正の外交的課題を背景に国内体制を整備する明治維新の諸改革が展開された」と設定した。

【パフォーマンス課題】

あなたは博物館で歴史コーナーを担当する学芸員です。鉄道開通150周年を記念して、「明治の文明開化」という企画展を実施することになりました。企画展にむけて、①「明治の文明開化」のなかからどのようなテーマを設定し、②そのテーマ(①)をもとに何をどのように展示して、③その企画展を通じて何を伝えたいか(何を知ってほしいか)、①から③を具体化させて企画展にむけた提案書を完成させなさい。

真正の評価を形づくる「パフォーマンス課題」設計の要素として、ウィギンズとマクタイは、「ゴール (Goal)、役割 (Role)、相手 (Audience)、状況 (Situation)、完成作品・実演・意図 (Product, Performance and Purpose)、成功を評価するスタンダードと規準 (Standards and Criteria for

Success)」をあげ、「この仕方で組み立てられた課題は生徒に、明瞭なパフォーマンスの達成目標を与えるだけでなく、脱文脈化されたテスト項目やアカデミック・プロンプトにはみられなかったような現実世界における意義を感じさせるものとなる」と論じている⁽¹⁶⁾。本課題では、歴史コーナーを担当する学芸員という「役割」をもとに企画展「明治の文明開化」にむけた提案書を完成させることが求められている。評価の観点としては、課題文と対応させる形で、(1) テーマ設定の独創性と明晰さ、(2) 展示内容と方法、(3) 展示を通じて伝えたいこと、(4) 展示するうえでの工夫、(5) 全体の構成の五項目とした。

具体的に作品づくりに入っていく前に、その補助線として「探究」のプロセス（課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現）を示した。カリキュラムデザインとして「探究」は「総合的な探究の時間」と密接にかかわるものであるが、単独では十分に機能しないため、土台としての教科学習を「探究」とどのように連動できるかが重要となる⁽¹⁷⁾。「探究」との連動を意識することは、言語活動としても、「問いの掘り下げが弱いまま、ネットで調べてきたことをまとめて発表して終わり」というのを防ぐ役割を果たす⁽¹⁸⁾。作品づくりの情報の収集にあたっては一人一台のタブレット端末を活用し、(1) 展示のテーマを設定するための情報を集める、(2) 実際の博物館、美術館の展示テーマや展示の工夫を調べる、(3) (1)、(2) をふまえてどのようなテーマ設定、展示ができそうかをまとめる活動をした⁽¹⁹⁾。これらタブレット端末を活用したまとめ活動を経て、提案書の下書きをした。下書きに対しては、形成的評価として朱書きの添削を行ない、加えて生徒同士での相互検討会を実施した。検討会でのコメントをふまえて、最終的な提案書を完成させ、明治維新の学習を終えた。

作品例の検討

本実践は高等学校歴史教育を対象にしたものであると同時に、先述したように「探究」との連動を意識した。さらには、「パフォーマンス課題」の性格をふまえて、本実践を学校全体のカリキュラムと有機的につなげるために、下記の二点との連動を意識した。

第一に、キャリア教育との関係性である。学習指導要領の「総則」には、「学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要として各教科・科目等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること」とある⁽²⁰⁾。先述したように、「パフォーマンス課題」は「役割」、「相手」、「状況」などの要素が含まれているため、「現実世界における意義を感じさせるもの」になっている。本実践での「パフォーマンス課題」では学芸員という「役割」をもとに企画展の提案をまとめる設計になっている。「パフォーマンス課題」は学習内容を総合化しまとめ

るという高次の能力が必要となってくる。そのため、カリキュラム・ポリシーとして基礎・基本の確実な習得を重視している場合、習得を土台とした時間をきちんと設けること、そのうえで「パフォーマンス課題」を提示し、この学習がどのように仕事、社会へとつながっているのかを十分にふまえる必要がある。本実践でも、校外学習の経験をふまえ、学芸員とはどのような仕事か、展示に向けてどのような準備が必要かなどを作品づくりの前に紹介した。特に、歴史は「現在」と断絶した「過去」のものであり、「現実世界」とも隔絶した暗記一辺倒のものにとらえられやすい。「パフォーマンス課題」は、そうした試験制度と結びついた従来の歴史学習を乗り越え、課題文にある「役割」をふまえキャリア教育との関係性を丁寧に見出すことで、社会的文脈をもって見通しを立てながら学習に取り組むことができるものともいえる。

第二に、言語活動の充実化との関係性である。学習指導要領の「総則」には、「言語能力の育成を図るため、各学校において必要な言語環境を整えるとともに、国語科を要として各教科・科目等の特質に応じて、生徒の言語活動を充実すること」とある⁽²¹⁾。「パフォーマンス課題」は何かしらの言語活動が求められるため、国語科の構造、学年段階をふまえた指導が重要となる。本実践の「パフォーマンス課題」では、国語科の構成要素のなかでも「書くこと」が密接に関連している。例えば、高等学校の「国語表現」における「書くこと」では以下の点が明記されている⁽²²⁾。

【国語表現】

- (1) 書くことに関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。
 - ア 目的や意図に応じて、実社会の問題や自分に関わる事柄の中から適切な題材を決め、情報の組合せなどを工夫して、伝えたいことを明確にすること。
 - イ 読み手の同意が得られるよう、適切な根拠を効果的に用いるとともに、反論などを想定して論理の展開を考えるなど、文章の構成や展開を工夫すること。
 - ウ 読み手の共感が得られるよう、適切な具体例を効果的に配置するなど、文章の構成や展開を工夫すること。
 - エ 自分の考えを明確にし、根拠となる情報を基に的確に説明するなど、表現の仕方を工夫すること。
 - オ 自分の思いや考えを明確にし、事象を的確に描写したり説明したりするなど、表現の仕方を工夫すること。
 - カ 読み手に対して自分の思いや考えが効果的に伝わるように書かれているかなどを吟味して、文章全体を整えたり、読み手からの助言などを踏まえて、自分の文章の特長や課題を捉え

直したりすること。

前節の展開過程と照らし合わせるならば、本実践では、企画展の提案書に向けたテーマを決めること、そのために必要となる展示物や方法を選び効果的に配置すること、自らの構想をもとに展示を通じて伝えたいことを明確にすること、検討会などでの助言をふまえて文章全体の構成を整えることが「書くこと」の言語活動として重要な軸となる。「パフォーマンス課題」の開発的研究では、実践単独だけではなく、カリキュラム研究として学校全体のなかでの位置づけや各要素との連動も重要な視点となる。こうしたマクロの視点および各要素との連動も射程におさめることで、授業改善と同時に学校教育目標の具現化を含めたカリキュラム改善を見通すことができる。

以上の位置づけや展開過程を経た実際の作品例（最終）が下記となる。以下では、テーマ設定と展示内容に分けて作品例を検討していきたい。

【作品例A】

文明開化によって変化した街並みと人々のファッション

欧米の文化を取り入れた街の風景を原寸化してガス灯やレンガ造りの建物を再現する。洋服を着た人々も入れる。にぎわっている様子がわかる音声も加える。

明治の人々が欧米の文化を取り入れたことによって、今の私たちがいるということ。現代の私たちにとって洋服などがあることは当たり前であり、なくてはならないものでもある。昔の人たちが切り開いてくれた今の未来に感謝するとともに、明治の人々の歴史が今もなお受け継がれているということへのすごさを知ってほしい。

【作品例B】

こんなものまで?! 明治時代で起きたお菓子の革命

明治時代で誕生したお菓子のサンプル、パッケージやそのお菓子の説明パネルを展示する。私は企画展を通じて伝えたいことが2つある。

1つ目は、明治時代はイギリスやフランス、アメリカの洋菓子が取り入れられ、多様化が進んだこと。

2つ目は、洋菓子と日本のお菓子が組み合わせられた和洋折衷のお菓子（あんパンなど）が誕生したことだ。

以上の2つをふまえて、明治時代は日本のお菓みに革命が起きたということを伝えたい。そして、普段から口にしていないお菓子は実は明治時代に誕生したことを知らせ、お菓子の文化を大切にしたい。

【作品例C】

鉄道について

明治の文明開化として、最も大きな変化はやはり鉄道の開通です。当時の人々は、この動く鉄を見て、どう思ったのかを、実際のそのころの写真や鉄道のレプリカを置いておきます。豊川市の日本車両の前にも機関車のモデルがおかれてあります。実際のものを見ることがにより、さらに明治を身近に考えられるようになると思います。また、鉄道の進化を知られるような歩きながら時代を進めれるトンネルのようなものを置き、現代の電車がどのようにしてできたのかを知ってもらいます。この企画展を通じて、今の日本の文明のなりたちを知ってほしいです。

【作品例D】

現代の鉄道ダイヤ編成までの道のり

鉄道開通 150 周年を記念して、蒸気機関車と鉄道車両をどの角度からでも見えるように展示し、旧暦と太陽暦の違いの説明も展示する。なお、体験としては、蒸気機関車が走っている音を体験できるようにする。

展示会を通じて、太陽暦が導入されたことにより、1日が24時間と制定され、現代の鉄道ダイヤ編成に大きく影響したということや、明治時代の文明開化によってレールなどの物を作る技術も発展していったということを知ってほしい。文明開化によって、日本は急速な近代化を行うことができたのである。

(付記) 上段：展示企画のテーマ/下段：展示企画の内容

企画展のテーマ設定（上段）について、作品例ではファッション、食品（菓子）、鉄道がテーマになっている。テーマ設定にあたっては提案内容との関係性を意識しながらキーワードを位置づける必要がある。作品例Aには「変化」、作品例Bには「革命」とあり、文明開化によってどのような変容があったのか、さらにそこでの文化形成が現代にも通じているという主題設定になっている。作品例Cと作品例Dを比較したとき、テーマの対象として鉄道を設定している点が共通している。ただし、Cでは「鉄道について」、Dでは「現代の鉄道ダイヤ編成までの道のり」とあり、テーマの差異がみられる。この差異からは、具体的にいえば、Cは「とあるものについて」というテーマの対象を記したものであるのに対して、Dはテーマの対象だけではなく展示を通じて伝えたいことにも関連させていることがわかる。草稿段階の場合はCのようなテーマの対象を定め、最終的な「まとめ・表現」の段階へと向かっていくなかでは本文の内容や自らの主張などと関連させたDのようなテーマへと深めていくことが重要となろう。

展示内容（下段）について、まずAでは当時の街並み、そこを通る人々が着る洋服、にぎわいの声を加える工夫がみとれる。Bでは、菓子の多様化が進んだとして洋菓子の受容だけではなく和洋折衷の視点も含まれている⁽²³⁾。CとDでは、太陽暦の採用に着目して、鉄道と時間概念が関連づけられている。ここで特筆したいのは、Cでトンネルを時間軸にたと

えているように、AからDの全てにおいて現代に通じる視点が含まれている点である。文明開化は、その時点での変容のみならず、その変容によってどのような文化が形成されたのかという点もあり、さらに課題文にある学芸員をふまえるならば今日的な現在地との関係性までふみこんで考察できる題材となる。「パフォーマンス課題」を通じて、生徒たちは「過去」、「現在」、「未来」という時間軸を意識しながら歴史的事象の意義をとらえ、提案書の完成に向かっていくことができたといえる。

おわりに

本稿では、明治の文明開化を題材に設定した「パフォーマンス課題」の実践を検討してきた。学習指導要領の今次改訂によって高等学校に観点別評価が本格的に導入され、「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善とともに、「指導と評価の一体化」をはかることが重要な課題となっている。歴史教育であれば、従来型の知識偏重を乗り越える形で、歴史的思考を中心軸に学びを深めていくことが肝要となる。総じて、本実践から見出すことができた視点として以下の二点をあげたい。

第一に、生徒たちが「パフォーマンス課題」内にある「役割」を意識しながら、現代とのつながりまでふみこんで歴史的事象の意義を考察しようとしていた点である。従来の「暗記」一辺倒であれば、生徒からみて歴史は「現実世界」と隔絶した「過去」のものとなってしまう、「なぜ歴史を学ぶのか」という意義も自ら積極的に見出すことは難しい。ただし、時間軸としての歴史と横軸としての国際比較の二軸を加えるならば、実際に私たちが生きる「現実世界」も国際的な広がりのもとで「過去」と「未来」の双方につながっていることになる²⁴⁾。木畑洋一は以下のように記している。「どのような問題であれ、その背後には歴史がある。そうした歴史のひだのどこかに注意してみると、『今』を生きる私たちの足元をより確かなものにしてくれるであろう。」と²⁵⁾。教科書の位置づけからすれば、文明開化は明治維新のさなかにあった「社会の変容」や「文化の形成」を指している。ここに「パフォーマンス課題」を通じて「役割」など社会的文脈をもたせることで、自らが設定したテーマを「現実世界」にひきつけて歴史的思考を深めていくことができる。本実践でも、「過去」、「現在」、「未来」の時間軸を意識した作品例をみることができた。この現代に通じる視点は、「なぜ歴史を学ぶのか」という学習の意義を見出すうえでも重要な役割を果たすといえよう。

第二に、本実践では、カリキュラム研究として探究、キャリア教育、言語活動との連動を意識しながら「パフォーマンス課題」の設定を組み立てた点である。学習指導要領の今次改訂では、「カリキュラム・マネジメント」の視点として、「各学校においては、生徒や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横

断的な視点で組み立てていくこと、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと」が明記された²⁶⁾。「パフォーマンス課題」の開発的研究といった場合、授業実践そのもののミクロの視点のみならず、カリキュラム全体を射程におさめたマクロの視点および各要素との連動も重要となってくる。「パフォーマンス課題」は内容の総合化など高次の能力が求められるため、カリキュラム研究の視点に立った位置づけを模索しながら実践を組み立てていく必要がある。本実践の場合、基礎・基本の確実な習得が重要視されているため、まずはこれまでの学習をふまえながら文明開化の要点や具体例を理解するための時間を設けた。そのうえで、キャリア教育との連動を意識し、学びに社会的文脈をもたせながら「パフォーマンス課題」を提示した。作品づくりにあたっては、一人一台端末を活用しながら、探究と言語活動との連動を意識した。連動のない実践単独だけではカリキュラムの歯車を効果的にまわしていくことは難しい。学校教育目標の具現化へと向かっていくためには、カリキュラム全体および各要素との連動を意識したうえで、実践の開発、実施、検証をしていくことが重要であり、この視点は授業改善とカリキュラム改善の双方を機能させる重要な鍵になる。2022年度は新学習指導要領の実施元年にあたる年度であった。全面実施をむかえるにあたって特色ある豊かな教育活動を組織していくためにも、学校現場を基盤としたカリキュラム研究としての視点の構築が今後の課題になってくるであろう。

注

- (1) 水原克敏『学習指導要領は国民形成の設計書 その能力観と人間像の歴史の変遷（増補改訂版）』（東北大学出版会、2017年）。
- (2) 文部科学省『高等学校学習指導要領（平成30年告示）』（東山書房、2019年）48頁。
- (3) 千々布敏弥『先生たちのリフレクション —主体的・対話的で深い学びに近づく、たった一つの習慣』（教育開発研究所、2021年）。
- (4) 丸山真男、加藤周一『翻訳と日本の近代』（岩波書店、1998年）68頁。
- (5) 佐藤卓己『ヒューマニティーズ 歴史学』（岩波書店、2009年）123頁。皆川雅樹は、「歴史総合」を例に、「教員側は、「問い」づくりのための講義や史資料などを提示するための教材研究はもとより、生徒自らが「問い」をつくり、概念などを活用して多面的・多角的に考察したり、歴史に見られる課題を把握し解決を視野に入れて構想したりするための場をつくる必要がある」と論じている。皆川雅樹「「アクティブ（・

- ラーニング」の黎明期を走り抜けた先に「日本史の授業実践を〈歴史総合〉につなげるには―」（宮崎亮太、皆川雅樹編著『失敗と越境の歴史教育 これまでの授業実践を歴史総合にどうつなげるか』清水書院、2022年、所収）26頁。
- (6) 前注（2）、28頁。
- (7) 論点整理については、若松大輔「観点別評価との付き合い方」（前掲書宮崎亮太、皆川雅樹編著、清水書院、2022年、所収）、八田幸恵、渡邊久暢『高等学校観点別評価入門』（学事出版、2023年）に詳しい。
- (8) 西牟田哲哉『2部 一体化に向かう世界』『思考・判断』から『資料活用』『知識・理解』へ（『世界史のしおり』2004年10月、No. 24、所収）26頁。
- (9) 前注（8）、27頁。
- (10) 西岡加名恵「パフォーマンス評価の開発と活用 ―カリキュラムと指導の改善にどうつなげるか―」（西岡加名恵編著『高等学校 教科と探究の新しい学習評価―観点別評価とパフォーマンス評価実践事例集―』学事出版、2020年、所収）9頁。「パフォーマンス評価」の研究動向と日韓の比較については、趙卿我「パフォーマンス評価の諸潮流 ―日韓の取り組みと課題に焦点を当てて―」（『愛知教育大学研究報告（教育科学編）』第71輯、2022年、所収）に詳しい。直近の実践研究を高等学校歴史教育であげるとするならば、例えば、市川和也「高等学校世界史Bにおけるパフォーマンス課題を取り入れた授業実践 ―単元「地中海世界の形成とオリエントとの融合」を例に―」（『教育方法の探究』第22号、2019年、所収）、美那川雄一『逆向き設計』論による世界史授業デザイン パフォーマンス課題・評価の試み（『歴史と地理 世界史の研究』山川出版社、2015年、所収）がある。
- (11) 前掲西岡加名恵「パフォーマンス評価の開発と活用 ―カリキュラムと指導の改善にどうつなげるか―」、14頁。
- (12) 前注（2）、57、67頁。
- (13) 文明開化を題材とした実践研究の例として、森口洋一「中学校社会科歴史的分野における文明開化の授業 ―「牛鍋」と「新聞」に着目して―」（『教育文化』第29号、2020年、所収）がある。この実践を通じて、森口洋一は「牛鍋普及の背景を、富国強兵とも関連させて生徒に考えさせる」ことができたとしている（40―41頁）。
- (14) 百瀬響『文明開化 失われた風俗』（吉川弘文館、2008年）17頁。
- (15) 『明解 歴史総合』（帝国書院、2022年）81―82頁。
- (16) G. ウィギンズ、J. マクタイ著、西岡加名恵訳『理解をもたらすカリキュラム設計 ―逆向き設計』の理論と方法』（日本標準、2012年）190、191頁。
- (17) 梨子田喬は、「総合的な探究の時間」の「探究」を、教科と連動しながら「高校での探究的な学びをまとめあげる、いわばカリキュラムの中核的役割を担うもの」と位置づけている。梨子田喬『「歴史探究」と『総合的な探究の時間』をつなげる『問いづくり』』（前川修一、梨子田喬、皆川雅樹編著『歴史教育「再」入門 歴史総合・日本史探究・世界史探究への「挑戦」』清水書院、2019年、所収）252頁。
- (18) 松下佳代『対話型論証による学びのデザイン 学校で身につけてほしいたった一つのこと』（勁草書房、2021年）7頁。
- (19) 一人一台端末を活用した実践事例として、若松大輔、鎌田祥輝、西岡加名恵「小中一貫校における1人1台端末とパフォーマンス課題を導入した単元開発 ―京都市立凌風小中学校における社会科・理科の事例検討」（『教育方法の探究』第25号、2022年、所収）がある。学習指導要領の「総則」には、「情報活用能力の育成を図るため、各学校において、コンピューターや情報通信ネットワークなどの情報手段を活用するために必要な環境を整え、これらを適切に活用した学習活動の充実を図ること」とある。前注（2）、28頁。
- (20) 前注（2）、29頁。
- (21) 前注（2）、28頁。
- (22) 前注（2）、44頁。
- (23) 文明開化は西欧からの新たな受容のみならず、ここにある和洋折衷や何がかかわらなかったのかという視点も重要となる。「江戸の残像」にかかわる各論として、岩下哲典編著『「文明開化」と江戸の残像 1615～1907』（ミネルヴァ書房、2022年）がある。また、「文明」に着目し、江戸後期の思想史にその萌芽を見出そうとした著作として、荻部直『「維新革命」への道 ―「文明」を求めた十九世紀日本』（新潮社、2017年）がある。
- (24) 磯田文雄は、「現在」をみつめ、「未来」を展望する二軸として「歴史」と「他者」をあげている。磯田文雄『教育行政 分かち合う共同体をめざして』（ミネルヴァ書房、2014年）29頁。
- (25) 木畑洋一「おわりに ―『今』を見る眼と歴史 ロシアのウクライナ侵攻から考える」（南塚信吾、小谷汪之、木畑洋一『歴史はなぜ必要なのか ―「脱歴史時代」へのメッセージ』岩波書店、2022年、所収）222頁。
- (26) 前注（2）、20頁。

【付記】

本研究は、令和5年度校長裁量経費（宇部工業高等専門学校・教育向上等推進経費）の支援を受けたものである。実践の実施、検証にあたっては、社会科の先生方から貴重なご助言をいただいた。ここに記して深甚なる謝意を申し上げます。